

子どもの心とからだの健やかな成長をめざして —こころを支えるために—

2022/08/20

第41回愛教組連合養護教員研究集会

8月20日、第41回愛教組連合養護教員研究集会が開催され、県内各地の女性部長、養護教員約180人が参加しました。「子どもの心とからだの健やかな成長をめざして—こころを支えるために—」をテーマに基調提案・意見交換・講演を行い、学習を深めました。

講演会

演題：「こころを支える色彩心理」

講師：時任春江さん（日本疲労メンテナンス協会代表理事）



「色彩心理療法とは、色彩を使って、性格や深層心理などを読み取り、本来の自分に気づかせ、悩みを改善の方向へと導くものである。例えば『学校へ行きたくない』と訴える子どもがいたとき、『今日の自分は何色かな』と聞いてみる。黄色なら『自分に自信がない』、緑色なら『みんなとなかよくなれない』など、それぞれの色から心の内側にある思いを知るヒントが得られる。このとき、今の自分を色に例えて聞くことがポイントである」とのお話をいただきました。

また、色彩には、それぞれにポジティブな意味とネガティブな意味があることや、ありのままの自分を認め、周りも「みんな違って、そのままの色でいい」と受け入れてくれる環境が大切であることを教えていただきました。

時任さんの講演を通じて、子どもたちの心の声を聞き、心を支えるための手だてを学ぶことができ、たいへん有意義な会となりました。

基調提案

子どもたち一人ひとりにきめ細かな対応をしたり、健康教育を充実させたりしていくために、養護教員の複数配置の拡大や妊娠した養護教員の負担軽減措置等の拡充が重要な課題であることは共通している。

県内の養護教員が一同に会するこの会で、情報を共有し合い、制度の拡充につながるよう、ねばり強く取り組んでいきたい。

意見（養護教員の職務の現状と課題）

- ・ 複数配置のありがたさを日々感じている。二人で協力することで、事務処理の効率を上げることができ、子どもたち一人ひとりにしっかり向き合う心のゆとりが生まれ、きめ細かな対応につながっている。一人が保健室で子どもに対応していても、もう一人が教室で保健教育を行うことができるため、学校全体の保健教育が充実している。

また、子どもたちを多面的にとらえ組織的に対応したり、救急処置などを迅速に行ったりすることができるため、保健室経営において複数配置は必須である。

しかし、本校の全校児童数を考えると、再来年度より単数配置になる可能性がある。これまでのように充実した保健教育ができなくなるばかりか、子どもたちにきめ細かな対応ができないのではと危惧している。

そうならないためにも、複数配置基準の引き下げ、とりわけ既配置校における複数配置緩和措置のさらなる拡充を強く希望する。

- ・ 複数配置校には、養護教員が二人いるという理由で、負担軽減措置を活用することができない。そのため、複数配置校で妊娠をした養護教員は、「もう一人の養護教員に負担をかけてしまっている」、「体調が悪くても健診の時期は休みづらい」と心身の負担を訴えている。また、「子どもの人数が多く、日常の保健室対応がたいへんだから複数配置となっているのに、負担軽減措置が適用されないことに不公平感を感じる」という声があがっている。

妊娠した養護教員の負担軽減措置が、単数や複数という学校体制によるのではなく、養護教員の母性保護のための権利として活用することができれば、負担が軽減され、結果として、子どもたちへの支援の充実につながると考える。複数配置校の養護教員にも負担軽減措置が適用されることを強く希望する。

参加者の声

- ・ 複数配置校の現状を知り、児童生徒数の多い学校の切実な状況について、ともに考えていく必要性を感じた。また、妊娠中の養護教員が少しでも安心して働けるよう取り組んでいきたい。直接会場で話を聞くことができて、たいへん勉強になった。
- ・ 時任さんの講演は、とても興味深い内容であり、明日から学校で生かせるものであった。小学生は、語彙力も表現力も未熟なため、色彩の力を借りることは有効な手だてであると感じた。また、保健室の環境づくりにおいて、色彩のもつ効果を最大限に生かしていきたい。